

伝統や文化に関する教育の充実に向けて — 音楽科における「意味や価値を実感する学び」 —

2026年5月21日

発表者：長谷川 慎
静岡大学教育学部教授
(音楽教育・地歌箏曲演奏家)

1 はじめに

芸術WG資料等で示されている方向性

- ・自分や他者にとって音楽表現や鑑賞がもつ意味や価値を見だし、表現や鑑賞を深める
- ・音や音楽を、生活・社会・伝統・文化などに関わらせて捉える
- ・高次の資質・能力の育成を通して、音楽のよさや美しさを味わう学びを深める

これらを踏まえ、本発表では「意味や価値を見いだす」ことを、児童生徒が自分の経験として「実感する」学びとして捉える。

現状の課題

- ・「弾いて終わる」「聴いて終わる」
- ・単発的な学習になりやすい
- ・技能習得が目的化しやすい

問題提起

我が国や郷土の伝統音楽を、「文化として体験する学び」へどう深めるか

2 技能や知識を音楽文化の意味を見いだすことへつなげる学び — 音楽を文化として学ぶ視点 —

私の問題意識

- ・限られた授業時間の中で歌唱・器楽・創作（音楽づくり）・鑑賞など多様な内容を扱う必要がある
- ・特定の伝統音楽を専門的に習得することには限界がある

吉川英史『日本音楽の性格』

民族様式の外に，時代様式，流派様式などが極めて複雑に交錯しているのが日本音楽の実相である。用ひる楽譜や楽器の相違もさることながら，その表す美の性格も，清雅な雅楽，幽玄な能楽，豪壮な義太夫，優雅な三曲，爽快な長唄，いきな小唄，さびた歌沢などと，それぞれに独自性をもっているのである。それ故に，昔から日本人は之等を総括して抽象的な「音楽」と呼ぶようなことはしなかった。一中略—日本には音楽と言うものではなくて，唯，雅楽があり，声明があり，能楽があり，新内があり，都々逸があるばかりである

2 技能や知識を文化理解へつなげる学び — 音楽を文化として学ぶ視点 —

日本伝統音楽の特徴

- ・それぞれ異なる音色や美意識をもつ
- ・「日本音楽」という単一様式ではない、多様な文化が共存している

重要なのは知識や技能の習得を通して

- ・多様な我が国や郷土の伝統音楽のよさを感じ取る感性を育てること
- ・音楽文化の意味を見いだすことへつなげる
こと

提案

「音色（ネイロ）」 「間（マ）」 「節（フシ）」 「手（テ）」
といった、多様な我が国や郷土の伝統音楽に通底する美意識を、
身体的・体感的に学ぶことが重要

3 身体を通して日本音楽を学ぶ

— 口唱歌・模倣・聴唱聴奏とICT活用 —

大学授業におけるこれまでの実践

- ・ 口唱歌を用いた箏指導
- ・ 学生による中学校器楽授業実践
- ・ 小学校での箏合奏指導

口唱歌の役割

- ・ 裏拍を感じる
- ・ 間（マ）を共有する
- ・ 合奏の呼吸をそろえる

我が国や郷土の伝統音楽の学び方

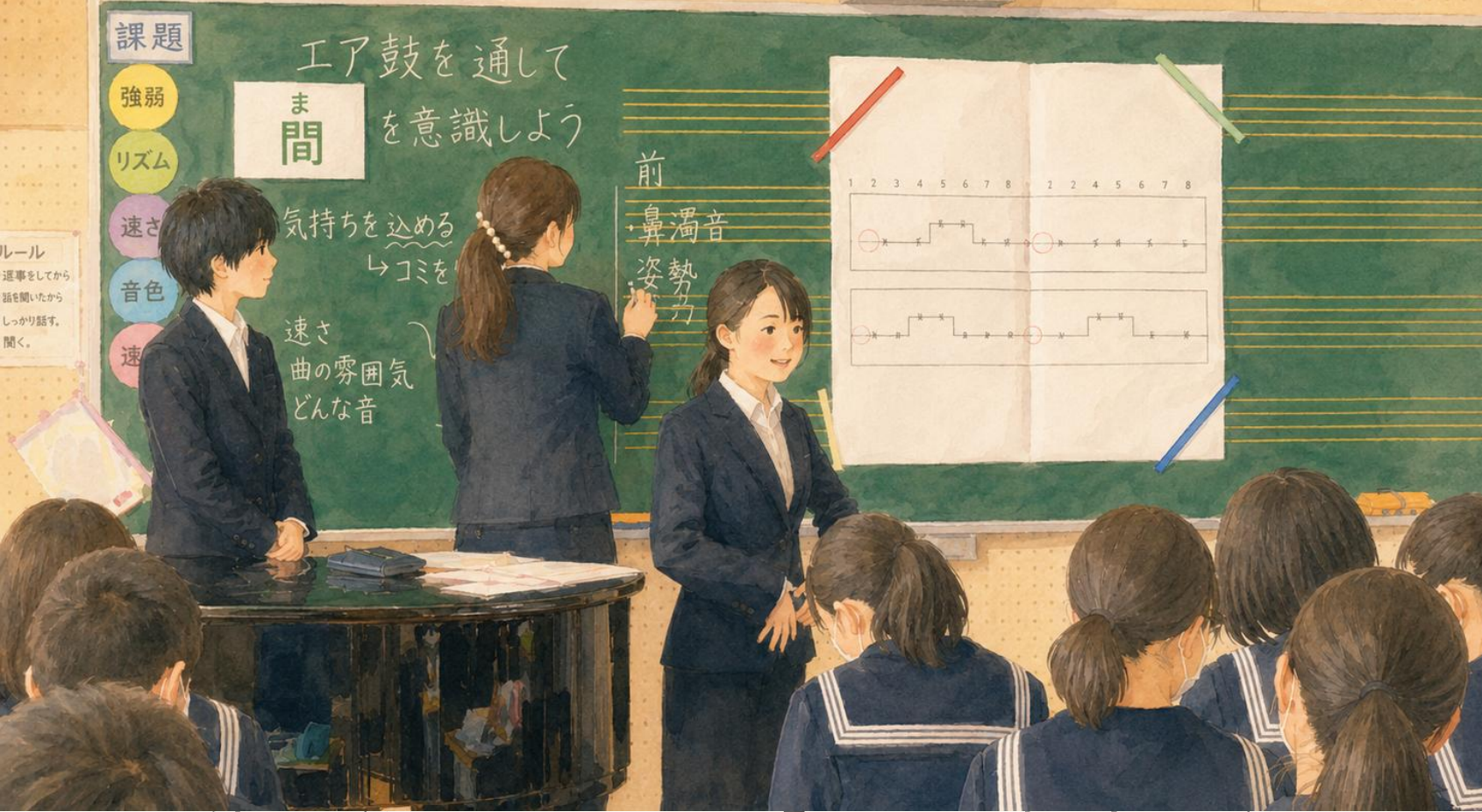
- ・ 聴唱・聴奏
- ・ まねる
- ・ 身体で感じる
- ・ 息を合わせる

ICT活用の可能性

- ・ 動画や音源による模倣学習
- ・ 演奏者の身体動作や音色の共有
- ・ 教師の専門性を補完する教材活用

学びの意味

「音を理解する」のではなく、「身体を通して音楽文化についての理解」を深める



能の学習を通して「間」の概念を学ぶ
(静岡県内の中学校)



小学校での箏合奏指導
(静岡市内の小学校)

箏講習会用動画 🔍

 <p>1:17</p>	<p>平調子から乃木調子への合わせ方 長谷川慎静岡大学</p>	 <p>0:49</p>	<p>トレモロ 長谷川慎静岡大学</p>
 <p>1:10</p>	<p>流し爪 長谷川慎静岡大学</p>	 <p>1:19</p>	<p>押し手 長谷川慎静岡大学</p>
 <p>1:47</p>	<p>かき爪 長谷川慎静岡大学</p>	 <p>1:24</p>	<p>後押し 長谷川慎静岡大学</p>

学習者が箏の奏法を主体的に学ぶための動画サイトの活用 (発表者制作)

4 我が国や郷土の伝統音楽の美意識をどう学ぶか — 音色・間・節・手という視点 —

吉川英史(1948) 『日本音楽の性格』

他の民族に見られない日本人の独特な音楽的美意識を指摘

- ・ 単音愛好性
- ・ 余韻愛好性
- ・ 噪音愛好性
- ・ 声楽愛好性
- ・ 音色尊重主義

学びへの示唆

音色・余韻・間を理解するためには、模倣や口唱歌など身体的な学びが重要

実践的視点

- 自身の地歌箏曲演奏家としての身体知
 - ・ 音色（ネイロ）
 - ・ 間（マ）
 - ・ 節（フシ）
 - ・ 手（テ） = 『型』 の概念とも深く関係

演奏実践から見える「音色」を捉えることの重要性

- ・ 三味線は音楽ごとに音色が異なる
- ・ 声の音色が音楽の個性を形づくる
- ・ 我が国や郷土の伝統音楽は「音色」を聴き分ける文化

5 地域とつながる「丸ごとの学び」

— フィールドワークと地域連携 —

フィールドワークの実践

- 和文化体験
 - ・4月：「都をどり」と「文楽」を京都・大阪で鑑賞
- 「こきりこ」学習
 - ・10月：富山県五箇山地区
 - ・歌だけでなく踊りも体験
 - ・地元の民謡保存会との交流「思い」を知る

地域連携の実践

- ・静岡市の小学校との連携
- ・大学生による「駿河地搦き唄」の発表
- ・小学生への民謡の伝承活動

学びの深まり

- ・地域文化を「受け継ぐ」経験
- ・音楽を「生きた文化」として理解
- ・世代を超えた文化的つながり
- ・地域への愛着や誇り

提案

地域と関わりながら学ぶことで、音楽の意味や価値を実感する



五箇山・こきりこ祭りでの「こきりこ」学習
(指導学生と保存会)



《駿河地搗き唄》を大学生が小学生に伝授
(静岡市内の小学校)

6 身体を通して日本音楽を学ぶ

— 口唱歌・模倣・聴唱聴奏とICT活用 —

教科等横断と道德教育につながる学び

— カリキュラム・マネジメントの視点 —

○系統性のある学び

- ・ 小学校：わらべうた・民謡
- ・ 中学校：箏曲・地歌・長唄・雅楽・能・
文楽・歌舞伎
- ・ 表現と鑑賞の往還

○教科等横断

- ・ 社会科（歴史） × 音楽科（雅楽）
- ・ 総合的な学習の時間（地域文化）
- ・ 理科（音の学習） × 音楽科（楽器の音色）

地域との連携

- ・ 保存会
- ・ 演奏家
- ・ 地域行事
- ・ 伝統芸能継承者

音楽科と道德教育との関連

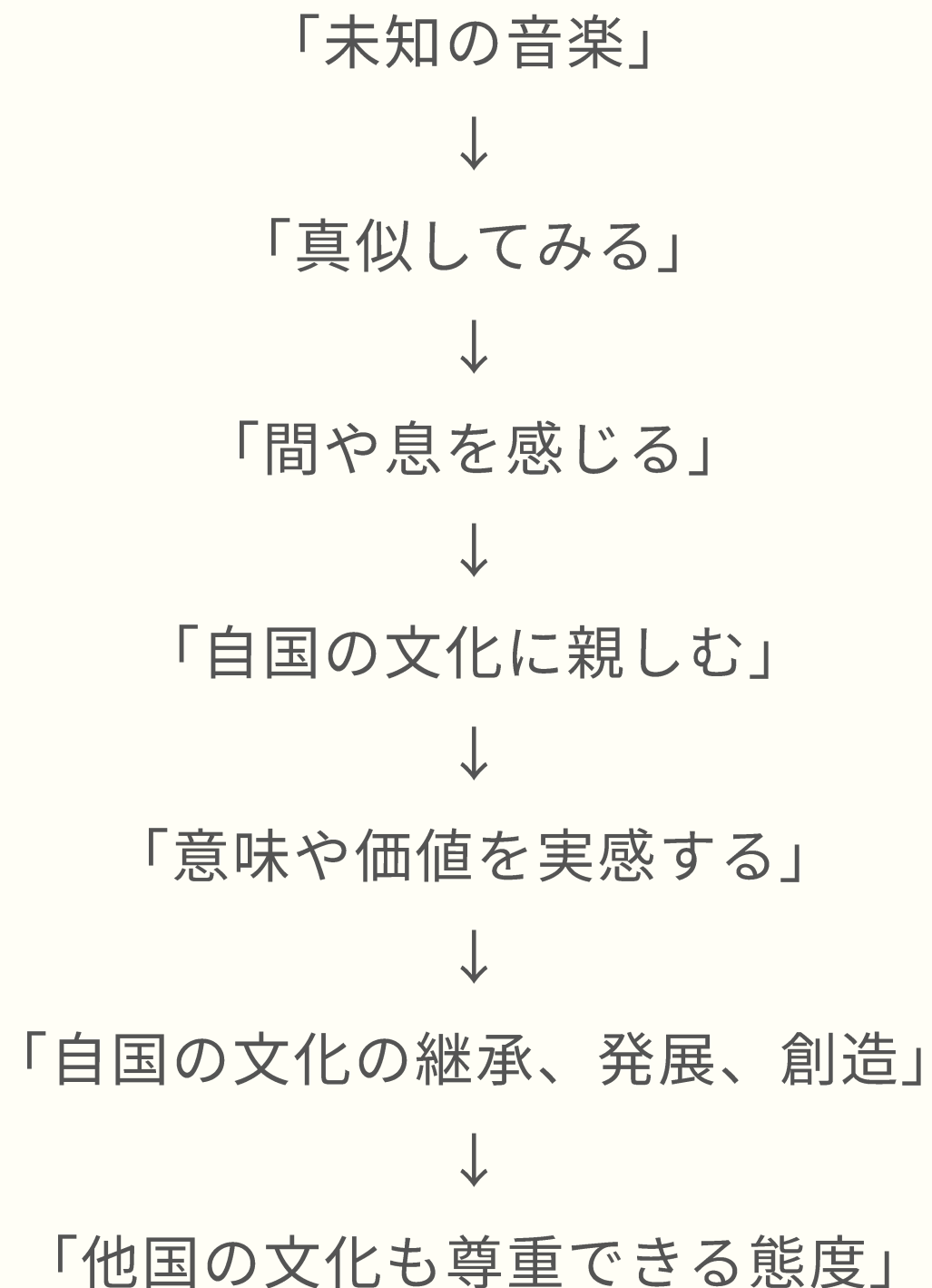
- ・ 伝統音楽の学習を通して育まれること
- ・ 伝統と文化の尊重
- ・ 郷土を愛する態度
- ・ 我が国を愛する態度
- ・ 国際理解・国際親善

自国の文化を深く理解することが、他国の文化を尊重する態度につながる

7 「意味や価値を実感する」学びへ

— 音楽科における伝統文化教育の充実 —

学びの深まり



提案

- ・ 我が国や郷土の伝統音楽の学習では知識や技能の習得を基盤とする「音色」「間」「節」「手」といった美意識を体感的に学ぶ
- ・ ICTを活用し身体知を共有する
- ・ 地域と連携した学びを重視する
- ・ 感性を育み、文化を通じて自分なりに創造しようとしていく態度を育てる
- ・ 伝統文化教育について、教員養成段階及び教員研修の更なる充実を図る

我が国や郷土の伝統音楽の学習は、知識や技能の習得を通して、自国の文化の継承、発展、創造し、他国の文化を尊重する態度を育む学びとして、さらに充実させていく必要がある。